

# 両面寺遺跡

RYOMENJI

SITE

1995・3

長野県飯山市教育委員会

# 両面寺遺跡

RYOMENJI

SITE

1995・3

長野県飯山市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は長野県飯山市大字寿字両面寺に所在する両面寺遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成6年度「特用林産产地化形成総合対策事業」に伴うもので、長野木糖事業協同組合の委託を受けて飯山市教育委員会が平成6年7月2日から7月22日まで実施した。
- 3 今回の調査面積は650m<sup>2</sup>であり、弥生時代・平安時代の遺構と、縄文時代・平安時代の遺物を少量、弥生時代中期の遺物を多量に検出した。
- 4 発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

### 飯山市遺跡調査会（平成6年度）

顧問	小山 邦武	市長
会長	滝沢藤三郎	教育委員会委員長
副会長	水野 光男	社会教育委員長
委員	高橋 桂	文化財保護審議会会長・日本考古学協会会員
	田中 広司	議会総務文教委員長（平成6年12月11日退任）
	藤巻 泰雄	議会総務文教委員長（平成6年12月12日就任）
	中村 敏	公民館長
	小川 幹夫	教育委員会委員長職務代理
	岩崎 彌彌	教育委員会教育長
事務局長	月岡 保男	教育委員会教育次長
事務局次長	町井 和夫	教育委員会社会教育係長
事務局員	望月 静雄	教育委員会社会教育係
事務局員	川口 学実	

### 調査団

団長	高橋 桂	飯山北高等学校教諭
総括担当	望月 静雄	教育委員会事務局職員
調査員	常盤井智行	
	桃井伊都子	
	田村 涼城	
	小林 新治	

### 作業参加者（順不同）

小坂一葉・滝沢きよえ・清水隼人・高橋喜久治・田中朝治・山崎満枝・竹内大五郎・北條辰男・小林経

雄・樋口栄・藤沢和枝・万場義秋・小出まさ子・吉越まさの

### 整理作業参加者（順不同）

小林みさき・小川ちか子・川口学実・藤沢和枝

- 5 本書で使用された方位は磁北である。

- 6 本書の作成は高橋桂調査団長指導のもと、常盤井智行が主体となって行った。  
図面トレースは小川ちか子・藤沢和枝・川口学実があたり、遺物実測は常盤井があたった。遺物接合  
・写真撮影は田村が主体となった。文責は目次に記した。
- 7 発掘調査にあたっては長野木彥事業協同組合服部栄八郎・清水伸地両氏、尾崎区、菊田君夫氏のご協  
力を得た。記して感謝申し上げる。
- 8 発掘調査の図面・出土品は市内大深の飯山市埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

## 例 言

第1章 遺跡の位置と環境 .....	望月	1
1 地理的環境 .....	望月	1
2 歴史的環境 .....	望月	1
第2章 調査経過 .....	6	
1 調査に至る経過 .....	望月	6
2 調査経過 .....	6	
A 発掘調査 .....	常盤井	6
B 調査日誌抄 .....	藤沢	8
第3章 遺構と遺物 .....	10	
1 層 序 .....	常盤井	10
2 遺 構 .....	10	
3 遺 物 .....	桃井	14
A 繩文時代の遺物 .....	14	
B 弥生時代の遺物 .....	14	
C 平安時代の遺物 .....	18	
第4章 ま と め .....	高橋	19

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 1 地理的環境

両面寺遺跡は、長野県飯山市大字寿字両面寺285番地ほかに所在する。

甲信国境に源を発する千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。盆地を過ぎると、千曲川は信越国境の峡谷地帯（通称市川谷）を下り曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南河岸段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ。

飯山盆地は南北8km、東西4kmの紡錘形を呈しており、そのほぼ中央を千曲川が北流している。河西域はさらに南北に延びる長峰丘陵によって、東側を常盤平、西側を外様平と呼称している。常盤平は千曲川による広い氾濫源とわずかな自然堤防が認められる。一方、外様平は広井川が形成した肥沃な湿地を形成し、かつては春先に雪解け水を集めた広井川があふれ、一面湖沼のようになったといふ。

飯山盆地は、第三紀生水成層を基盤とし、褶曲構造によって形成されたといわれている。すなわち、西縁を画す関田山脈、盆地中央の長峰丘陵が背斜部に相当し、常盤平・外様平が向斜部に相当する。ただし、断層線も部分的に横走しているため、山地縁辺には断層崖による扇状地や、丘陵の平行移動など複雑な地形を呈している。

両面寺遺跡は、前記した長峰丘陵上に位置する。長峰丘陵は、飯山市街地北部の有尾から戸狩まで約6km続く丘陵で、盆地底との比高差は約100mである。常盤平に面する東側は比較的急斜面であるが、西側はなだらかに外様平の湿地に接する。

両面寺遺跡は、長峰丘陵が中途で分岐し尾崎で終わる支脈に位置している。地形は北に向かって収束しているが、東・北・西に向かってそれぞれ緩やかに低地に移行している。この支脈の先端には学史的に著名な柳町遺跡がある。柳町遺跡の中心地帯は、このうち西側に面した部分で、総面積は100,000m<sup>2</sup>に及ぶものと思われる。しかし、今回調査した両面寺地籍は支脈の東斜面にあたり、西斜面と比較して急斜面であることや林となっていて遺物の採集が困難な場所であった。このため、当初は柳町遺跡の範囲を拡大して把握しようとした。しかし地點的にも従来の場所より離れていたため、とりあえず『両面寺』遺跡として報告し、遺跡全体の範囲等については将来の課題としておきたいと思う。

なお、長峰丘陵の支脈の分岐点には弥生時代の集落である小泉遺跡や、それに接して東長峰遺跡など弥生・古墳時代の遺跡が密集する場所でもある。さらに、外様平をはさんだ西の関田山脈の山麓沿いには弥生・古墳時代の遺跡が密集している。

## 2 歴史的環境

飯山盆地の中心部に位置する両面寺遺跡周辺の遺跡分布は、古くからの調査によって密集していることが判明している（図2）。

旧石器時代の遺跡としては、千曲川の段丘や丘陵に立地する日焼（12）・屋株（14）・上野（15）・瀬付遺跡（18）や長峰丘陵上の大塚遺跡（19）がある。日焼は黒曜石製のナイフ形石器や搔器に代表される石器群で、ナイフ形石器を指標とする時期の末期に位置付けられている。屋株では安山岩製の横倉型ポイントと製作に伴う剥片類が小範囲より発掘されている（飯山市教委 1989）。上野では玉髓製の搔器が多量に発見されこれにポイントが伴うものと考えられており、類例の少ない注目すべき石器群であるといえる。このような遺跡の石器群は、ナイフ形石器終末器から旧石器時代末期の石器群と考えられるが、各方面からの文化

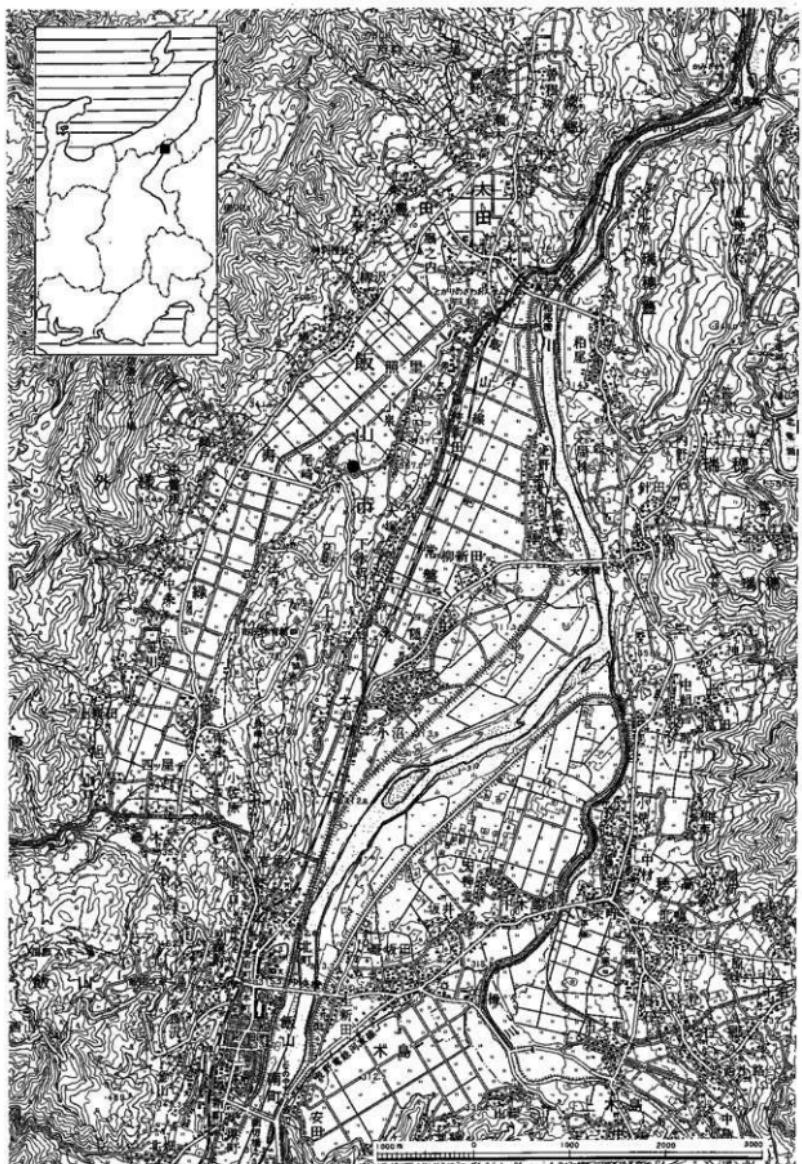


図1 遺跡の位置 1:50,000

的影響を受けながら変遷していったことが特徴といえるのではあるまい。

縄文時代になつても、千曲川沿いに分布する遺跡が多い。南原・屋株・大倉崎・有尾・須多ヶ峯遺跡などが著名である。南原では前期諸磯・式期の一群が発掘されている(飯山市教委 1994)。また、大倉崎では諸磯・式期後半に比定した良好な土器群を検出している(金井・高橋・中島)。有尾遺跡は、有尾式土器の標式遺跡として著名である。須多ヶ峯遺跡は全体が明らかにされていないが、中期初頭に位置付けられる土器がまとまっている(飯山市 1993)。

柳町遺跡を中心とした長峰丘陵の北半部には、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺跡が密集していることで知られている。調査された遺跡では、柳町遺跡に隣接する東長峰(24)、小泉(20)、照丘(11)の各遺跡がある。

この丘陵上には弥生時代の遺跡として小泉・尾崎・東長峰・照里・下林などの遺跡が知られている。古くは北沢量平・栗岩英治両氏によって弥生式土器・石器が長峰丘陵の尾崎や法寺から採集されていた。藤森栄一氏はこのうちの石器を「千曲川下流長峰・高丘の弥生式石器」と題して報告している(藤森 1937)。戦後、飯山北高等学校郷土研究会により次々に発掘調査が実施され、弥生期の住居址も多く発見された(森山 1950、清水 1950、森山 1951、東・清水・森山・寺崎 1951、飯沢 1954)。こうした一連の報告により長峰丘陵上の弥生遺跡が注目されるようになり、宮坂英氏(宮坂 1954)や桐原健氏(桐原 1955)によってその重要性が指摘された。昭和30年代にはいって、桐原健氏や高橋桂によって精力的に調査や踏査が行われた。その成果は、柳町遺跡の発掘調査(桐原 1957・1959)、照丘遺跡(高橋 1962・1968)、などの調査報告で示されている。

近年に至り、開発に伴う緊急発掘調査が増加し、再び柳町遺跡の周辺の発掘調査が行われるようになってきた。昭和62年、農村総合モデル事業に伴う釜淵遺跡の発掘調査では住居址が発見され、関田山麓に多くの弥生時代遺跡が点在することを改めて証明した。とくに、昭和63年より発掘調査が行われた小泉遺跡では、弥生集落が広範囲に発見されている。また、平成元年に行われた上野遺跡の発掘調査では、弥生時代中期・後期の竪穴住居址が発見されたとともに、平成5年の調査では約40基の木棺墓群が発見されている。数次の発掘調査で、上野遺跡は大規模な弥生集落であることが判明してきた。さらに、照丘遺跡は平成2年に発掘調査が実施され、中期の竪穴住居址群が発見された。

続いて古墳時代の遺跡や古墳も多い。上野遺跡では、前期の住居址が1軒発見され、北陸・新潟系の土器が一括して検出されている。また、方形周溝墓も4基発見されている。柳町遺跡では(21)前期住居址、須多ヶ峯遺跡でも同様に住居址が発見されている。一方、古墳は照里古墳群(53)や大塚古墳(53)、大塚古墳群(55)、上野古墳(58)、有尾古墳(57)があるが、いずれも発掘調査はなされていない。なお、有尾古墳は帆立貝式古墳と考えられてきたが、最近では前方後方墳とする意見が強くなっている(松沢 1983)。

奈良・平安時代の遺跡では、各所に遺跡が点在するようになるが、岡峰(2)、上野(15)、北原(40)が特に著名である。平安時代の鍛冶炉を多数検出した北原遺跡は、当時飯山地方が盛んに開拓されていった一端を語る資料として重要である。また、土壙墓(木棺墓)が岡峰、上野、小佐原(44)で発見されており、当時の墓制も明らかになりつつある。

中世では、集落遺跡として釜淵(34)がある。祭祀遺構より永仁四年の木簡が発見されている。また、城館跡としては尾崎館(28)、大倉崎館(59)がある。昭和63年に発掘調査を行った大倉崎館では、火災に遭ったと思われる館内より、青磁・白磁・越前系・珠洲系陶器、瓦器製火炉をはじめとする多くの遺物が発見されている。14世紀後半より15世紀前半の所産と考えられているが、館主については現在のところまだ明らかとなっていない。尾崎館跡は泉氏を祖とする尾崎氏の居城とされ、尾崎地区内にも三桜神社など尾崎氏ゆかりのものがある。今回調査した両面寺地籍には、その文字通りに両面寺という寺があったとされ、



図2 溝査地周辺の遺跡

1:25,000



図3 周辺地図 1:10,000

調査地区の南側には堂字があったと目される整地した部分も存在している。ただし、文献上には現れてこなく、それが尾崎氏と関係していたのかもわからっていない。

以上、旧石器時代から平安時代までを簡単に触れてきた。縄文時代までは千曲川沿いの段丘や丘陵に占拠し、以降長峰丘陵や関田山麓、あるいは湧水帯の認められる上野の丘陵を中心として、低湿地に接した地域に占拠するようになる。このことは、飯山盆地が開拓されていった第一波は弥生時代中期後半に始まったが、極めて限定された区域にとどまった。飯山盆地が真に開拓されていったのは、平安時代に入って漸く広い区域が開拓されていったことを伺わせるのである。

## 第2章 調査経過

### 1 調査に至る経過

平成6年

6月14日 市役所農林課による「特用林産地化形成総合対策事業」の打ち合わせがあり、出席した長野木業協同組合より、柳町遺跡に接した両面寺地籍にブナしめじ等の共同加工場の建設を予定しているとの話があった。主体者は長野木業共同組合で、国庫補助金を受けて平成6・7年度に建設するというものである。現地の状況は大半が山林であり、一部に休耕した畑地があった。この畑地において若干の遺物を採集していた。このため、柳町遺跡の範囲が対象地までかかると認められたため、事前の発掘調査が必要であるとの教育委員会の意見を回答した。

なお、工事計画が目前であることや今までの経過から、7月初旬より至急着手することとした。なお、発掘に伴う経費については、発掘作業賃金分を長野木業協同組合が負担し、その他の部分については市教委が負担することで合意した。

7月1日 長野木業事業協同組合代表理事山崎佑司氏より飯山市長あて発掘調査の依頼があり、同日付で発掘調査委託契約書を締結した。

### 2 調査経過

#### A 発掘調査

発掘対象地は図4に示した南北約120m、東西約60mの範囲である。東に傾斜する斜面で北半が雑木林、南半が段々畑であった。斜面の傾斜は下るにつれて急になる。そこであらかじめ重機による試掘を行い調査範囲を決めることとした。電機による試掘は3ヵ所で行った(図4参照)。その結果段々畑の下の2ヵ所ではトタン等を含む新しい埋土が表土下2m以上認められた。また雑木林である北半は南に比べ傾斜が急だったので、発掘調査の中心を南の段々畑の上段側とした。

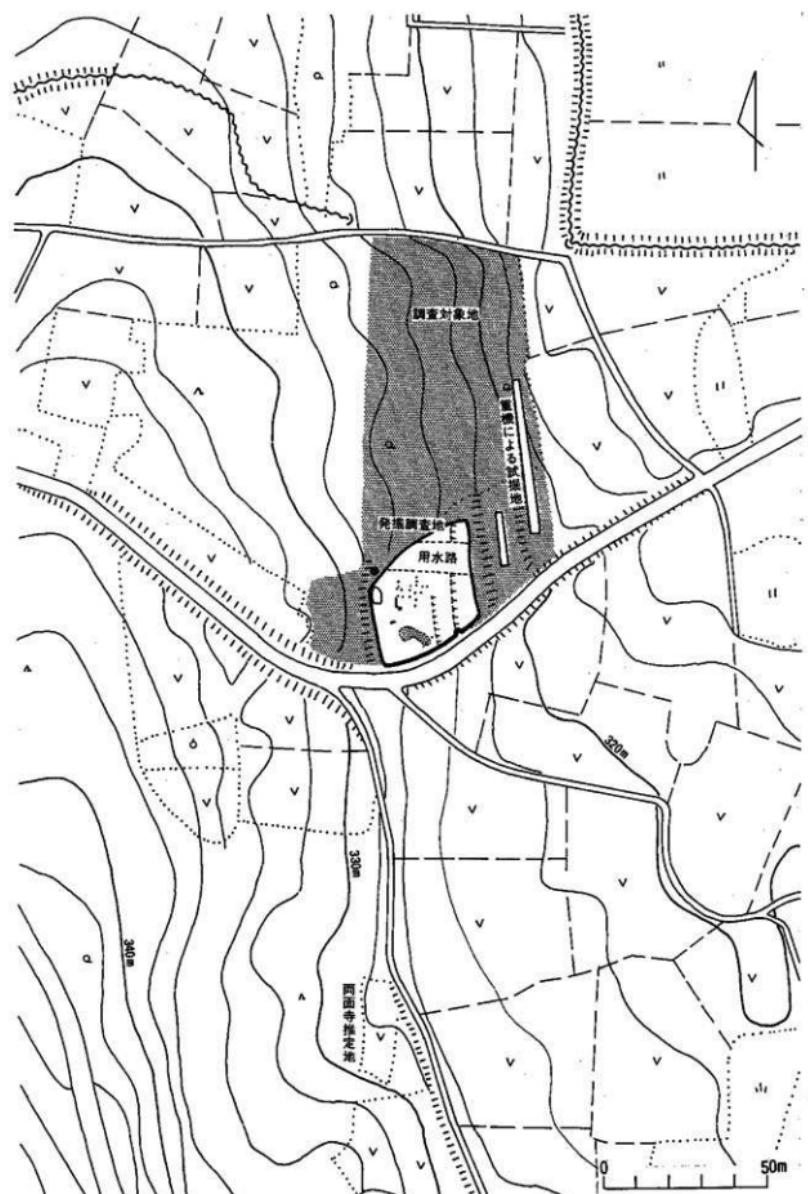
発掘調査は重機による表土剥ぎ、精査、遺構振り下げ、写真撮影、実測の手順で行った。

重機による表土剥ぎは南北約35m、東西約38mの範囲を行った。しかし北部は用水路敷設による搅乱のため、また東部の段下の畑地は削平が著しいと判断し、精査をやめた。ジョレン・移植ゴテによる精査を行ったのは図5に示した約650m<sup>2</sup>である。

調査地は後述のように地層が複雑であったためあらかじめ重機表土剥ぎの際に傾斜に直交する断ち割りトレンチを掘り、遺構面、遺物包含層を確かめてから表土剥ぎおよび精査を行った。遺構面・包含層ともに黒色土中であり、遺構の検出は難渋した。

グリッドは5m方眼を地形に合わせて任意に設定し、南から北へ1・2・3……、西から東へL・M・N……と付番した。

遺物は基本的にはグリッド毎に取り上げた。原則として出土状態の写真を撮影してから取り上げることとしたが、写真撮影なしで取り上げた場合も多い。



## B 調査日誌抄

平成6年

- 7月2日（土） 重機による対象地内の試掘および表土除去を行う。
- 7月4日（月） 現場テント設置。駐車場草刈り。基準杭打ち等の発掘準備を行う。午後西端よりジョレンかけにより精査。セクション帶の土層観察を行う。
- 7月5日（火） M・N-4～6区ジョレンかけ精査続行。N-4の北端で土器集中地点検出。小泉下水工事現場BM 316.648m（建設課設置）より基準杭へ高さをおとす。南北畦南側地山まで掘り下げ土層観察。100分の1略全体図作成。
- 7月6日（水） アセ断ち割り、土層観察。M・N・O-4～6区ジョレンかけ精査続行。O-6区西端で縄文土器出土。M-5・6区内で長方形遺構が検出。シルバー人材センター小林事務局長見学。
- 7月7日（木） 4ライン断ち割り。土層の写真撮影及び、実測。N-4～6区ジョレンかけ精査続行。黒色土厚い。N-4・5区内で溝状の遺構検出。P・Q区4ライン土層観察用試掘杭掘り作業完了。N・O-5・6区内で柱穴見つかる。
- 7月8日（金） N・O-5・6区の遺構上面検出状態を写真撮影。遺構検出面は茶褐色粘質土がベースで遺構は黒色土が入り込んでいる。N・O・P-4～6ジョレンかけ精査続行。N・O・P-4～6柱穴、M-5・6土坑の掘り下げ続行。
- 7月11日（月） SK1アゼを残して完掘、写真撮影及び、土層実測。N・O-4～6区内のピットのみ遺構掘り下げ。P-4・5区ジョレンかけ精査。遺構なし。N・O-2・3区ジョレンかけ開始。
- 7月12日（火） M-P-4～6区の完掘状態全景写真撮影。SK1完掘状態写真撮影。M-4区アゼに見えていた焼土坑のアゼを除去し上面の輪郭を確認し、写真撮影及び、掘り下げ続行。アゼ上層団O区以東作成。M-1～4区N・O-1～3区ジョレンかけ精査続行。O-2区内で焼2ヵ所検出。東及び北より遺跡遠望写真撮影。
- 7月13日（水） M・N・O-2～3区ジョレンかけ精査続行。黒色土上面で精査のため遺構みえず、M・N・O-3区黒色土の土層から暗茶褐色土層まで約20cmをスコップで下げ始める。黒色土中より弥生土器散出。O-2区で耕作土直下から焼土分布地点（直径1m）検出。O-3区黒色土中で安山岩片1片検出し写真撮影。L・M・N-4～6区40分の1遺構平面図作成。
- 7月14日（木） M-P-2・3区黒色土層ジョレンかけ精査続行。N-2・3区を中心に弥生中期土器集中出土。特にN-3区に著しい。N-Q-4～6区40分の1平面図作成。
- 7月15日（金） M・N・O-2・3区黒色土をジョレンかけ精査続行。弥生中期土器散在出土。M・N-4区アゼはずし。弥生中期土器少量出土するのみであった。PM3:30～テントを移動。テントの跡地を掘り下げ始める。
- 7月18日（月） L・M-1～3区埋土除去。M-P-2・3区ジョレンかけ精査。O-2区L-3区黒色土上面の焼土分布地略図及び写真撮影をし掘り下げる。

7月19日（火） L・M-2・3区耕作土、黒色土層除去終了。ジョレンかけに入る。焼土の分布、弥生土器散在出土。N・O-2・3区ジョレンかけ精査続行。黒色土中からの弥生土器の出土はほぼ終了。土器集中部分の写真撮影。午後5時から調査員会議。柳町、両面寺遺跡とも22日を終了日とすること、合同終了式を行うこと、須多ヶ峯遺跡の発掘を8月1日から開始することを決定。

7月20日（水） 黒色土ジョレンかけ精査続行。L・M-P-2・3区遺物出土状態全景写真撮影後遺物取り上げ。L・M-2・3区さらに黒色土を掘り下げ始める。SK3（L-2・3区）半割掘り下げ。

柳町遺跡現地見学会参加（午後3時30分～4時30分）

7月21日（木） L～P-2・3区遺物取り上げ後ジョレンかけ精査。黒色土下層の暗茶褐色土層を精査するが、遺構はピット数基と少ない。ピットはしっかり掘り込まれている。

7月22日（金） 40分の1全体図作成。200分の1調査地周辺地形図作成。器材の撤出、撤収を行い現地作業を終了。午後4時より柳町遺跡と合同で発掘調査終了式を尾崎公民館に於いて行う。

## 第3章 遺構と遺物

### 1 層序

調査地内の東西断ち割りトレンチの土層観察(図5)によれば、調査地内の基本的な層序は上層から、茶灰色土(耕作土)、黒色土、茶褐色粘質土、黄白色粘性砂土である。しかしP区で上下が逆転していたり、O・R区で黄色粘質土があたかも噴出したかのような恰好であつたり様相は複雑であった。

注意されるのはL～O区は現状では東へゆるやかに傾斜しているが、黄白色粘質土の地山はP区西端で高くなり、その間の黒色土層は水平に近く堆積していることである。同じことは調査地南壁土層でも確認され、南壁ではむしろ黒色土層は西側つまり山側へ傾斜する。そしてN・O区の地山上面は帶水層となっている。すなわち、M～O区はかつて北西から南東へ流れる沢状地であったことがわかる。調査地北西端には調査時も水を湛える井戸があった。

遺物包含量は黒色土で、黒色土内上層に平安時代の遺物が、下層に弥生時代の遺物が含まれていた。上層には所々焼土層があり、1所は焼土坑SK2である。SK2の掘り込み面は黒色土でも最上層である。

しかし黒色土中では遺構検出が困難であったので、遺構検出面は茶褐色粘質土層上面である。平安時代の遺構の多くを見のがした可能性があるし、茶褐色粘質土と黒色土と命名してはいてもその差は実際は境界がむずかしく茶褐色粘質土面での遺構検出も難渋した。

### 2 遺構

検出された遺構は土坑2、溝1、柱穴多数であり、黒色土が水平に近く堆積していたM～O～4～6区を中心に検出されている。年代が不明確なものが多いので一括して説明する。

**SK1** M-5・6区にある南北5.5m×東西3.1mの不整長方形土坑である。底はレンズ状を呈している。暗茶褐色土と黒色土が山側から流れ込んだかのように堆積している。遺物は弥生土器が少量出土している。弥生時代か。

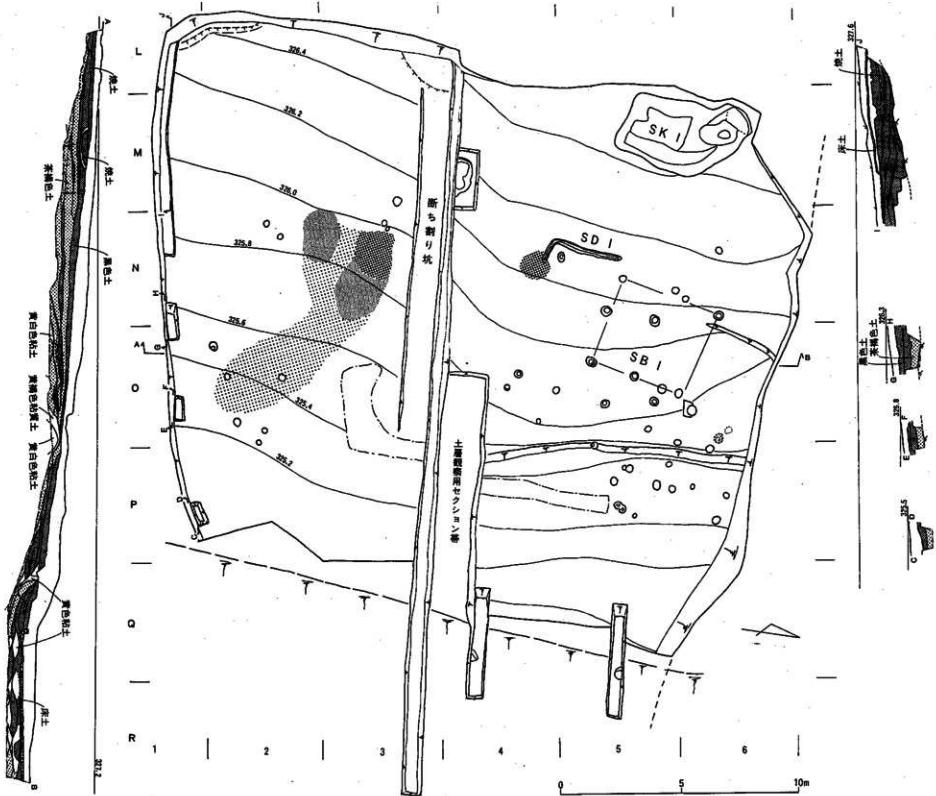
**SK2** M-4区にある焼土坑で、南半分を土層観察用断ち割り坑に切られる。東西1.5m×南北0.6m以上の不整長方形土坑である。埋土は黒色土で坑底および坑側に焼土、炭が多量にあった。遺物は平安時代の土器片が少量ある。平安時代の土坑であろう。

**SB1** N～P～4～6区で円形柱穴が多く検出されている。確実に建物としてまとめられるものではないが、建物の可能性のあるものとしてSB1を想定した。南北4.2m×東西3.6mのややいびつな長方形プランの掘立柱建物址で2間×2間に推定している。柱穴は円形プランで直径20～25cm、深さ30～40cm。出土遺物が少なく年代は不明。検出面の深さからすると弥生時代の可能性が高い。

**SD1** N-4・5区にある「L」字形の細長い溝で、約4m分を確認している。幅は15～20cm、断面「U」字形で深さ5cm。竪穴住居址の周溝とも考えられる。検出面の深さから弥生時代の可能性が高い。

**弥生土器集中地点** 遺構ではないが、弥生時代中期の土器が黒色土中の厚さ約15cmの中に集中していた地点がある。1ヵ所はN-4区で直径1mの範囲に3～5cmの弥生土器小片が密集していた。土器の遺存状態が悪く復元困難であったが、完形に近く復元できるものを含んでいる。

もう1ヵ所はN-O-2・3で、北西から南東に向かって傾斜に沿って分布していた所で、N-3区は特に集中していた。(PL4) 出土層位は茶褐色粘質土層上面から約10cm上で、集中層の厚さは10～15cm



スクリートーンの網目部分は発生土器集中地点を示す。網目の濃い方が集中度が高い。

図5 調査地全体図 1:160

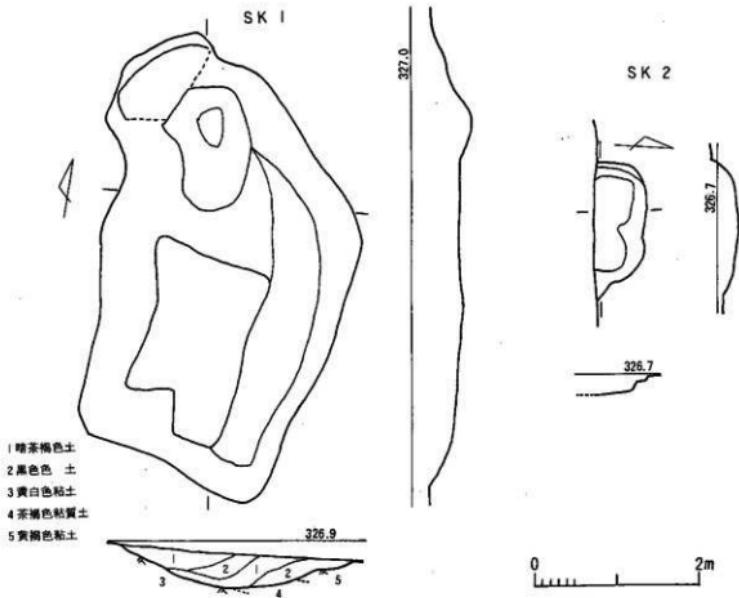


図6 土塙実測図 1:60

を測る。土器は10~15cmの大破片を含み、完成ないしそれに近く復元されるものが数個体含まれていた。  
出土総量はコンテナ約3箱分にものぼる。

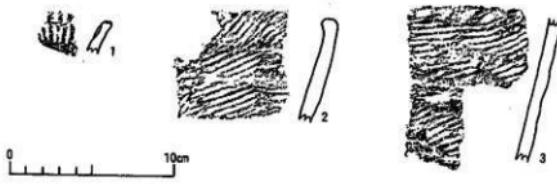


図7 繩文時代の土器 1:3

### 3 遺 物

#### A 繩文時代の遺物 (図7 1~3)

前期のものと思われる土器片がN-6区およびN-1区から数片出土している。

1は口縁部片である。口唇部および口縁部内面にヘラ状工具による刻み文が施される。胎土は砂粒をわずかに含み、色調は暗褐色。

2・3は同一個体の深鉢の口縁部片および胴部片と思われる。口唇部は面を有する。外面は無節の繩文がやや左下がりに施文される。胎土は砂粒を多く含み、軟質でザラついている。色調は茶褐色。

#### B 弥生時代の遺物 (図8・9 4~41)

##### (1) 土 器

確実に遺構に伴うものは無く、包含層中から出土したものであるが、接合により完形に近い状態に復元できるものが数点ある。

4は口縁部・底部を欠損する壺である。頸部を太いヘラ描沈線と刺突文がめぐり、胴上部は繩文部分と無文部分が太いヘラ描沈線により多段帯状に区画され、胴中部は重弧文がつながり無文を囲む島状の文様が施される。外面の頸部および胴下部はハケからヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキ、胴中部は指頭によるナデ、胴下位はハケ。胎土は砂を含み、焼成は良好。淡褐色を呈する。

5は大型の壺の上半部である。口唇部は繩文がめぐり、頸部は刺突文をはさむヘラ描沈線、胴上部は繩文地にヘラ描による直線文・波状文・刺突文および櫛描直線文が多段帯状に組み合わされ、胴中部は櫛描波状文・ヘラ描による島状の文様が施文される。外面はハケからヘラミガキ、内面は口縁部はハケからヘラミガキでそれ以下はほぼ全体にハケである。胎土は細かい砂粒を多量に含み、焼成は不良でザラついでいる。暗茶灰色。推定口径23.6cm。

6は壺の口縁部～頸部である。頸部に刺突文をはさむヘラ描平行線文がめぐる。磨滅が著しく調整は不明。胎土は砂粒を含み、やや軟質。黄褐色を呈す。推定口径10.2cm。

7は壺の頸部である。ヘラ描直線文と櫛描直線文の組み合わせ。外面ハケ、内面ナデ。胎土は砂をわずかに含み、茶褐色。

8はほぼ完形に復元された壺である。口唇部はヘラ状具による刺突文が施文され、波状口縁となる。胴上半部に1周7単位の継位直線文が施され、その間に横位櫛描波状文を施文する。外面の口縁部は横ナデ、頸部以下はハケ。内面は上半部はハケからヘラミガキ、下半分はヘラミガキ。胎土は砂粒をわずかに含み、焼成は良好で、色調は淡褐色。外表面に煤の付着がみられる。口径23.4cm、高さ29.0cm、底部径6.8cm。

9は胴下部～底部を欠損する壺である。口唇部に繩文がめぐり、胴中部に櫛描羽状文が施される。外面

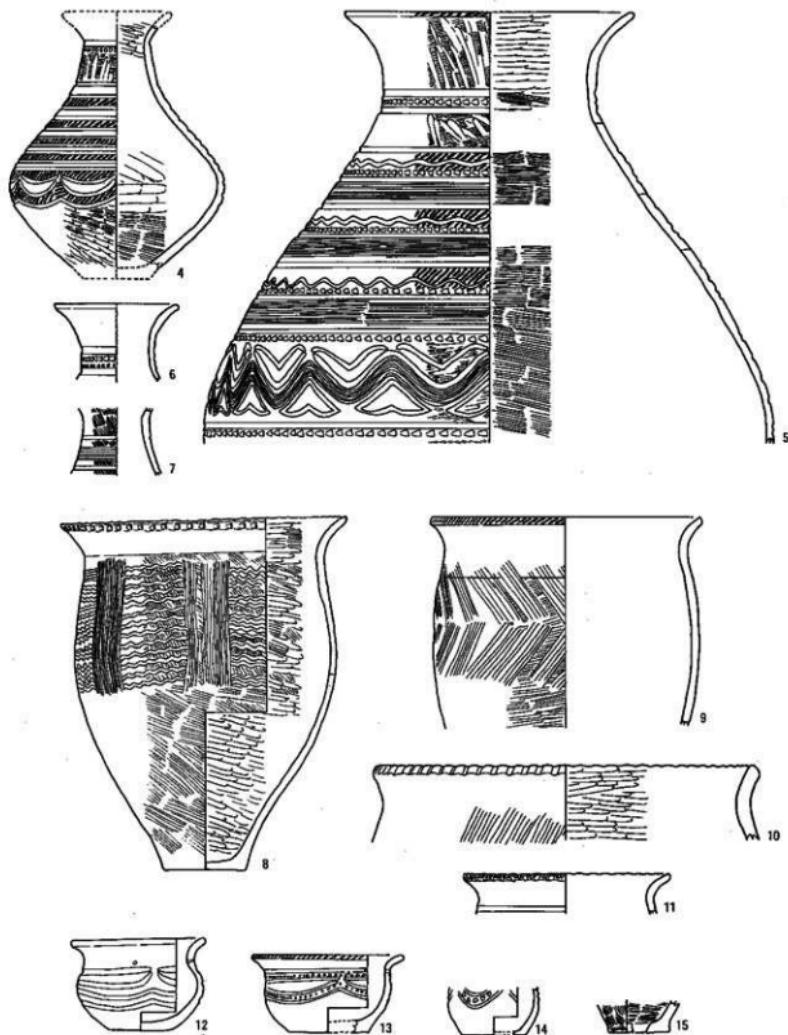


図8 弥生時代の土器1 1:4

は口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部以下はハケ。内面は器壁がかなり荒れているがナデないしヘラミガキと推定される。胎土は細かい砂粒を多量に含み、軟質でボロボロしている。色調は明褐色。外表面に煤が付着する。口径22.4cm。

10・11は甕の口縁部～頸部である。10は口唇部を刻み目文がめぐり、頸部以下に櫛描羽状文の一部が認められる。11は口唇部は繩文地文に押圧による文様がめぐり、頸部は太いヘラ描沈線がめぐる。10は外面は横ナデ、内面はヘラミガキ。11は内外面ともナデ。10の胎土は細かい砂粒をわずかに含み、暗黄灰色。11は砂粒を多量に含み、やや軟質で黄褐色。推定口径は10が31.8cm、11が17.0cm。

12・13はほぼ完形に復元された鉢である。12は胸部に太いヘラ描沈線による1周3単位の島状の文様および重弧文が配される。13は口唇部に繩文がめぐり、胴上部に刺突文を充填したヘラ描沈線による直線文・弧状文が配される。弧状文は1周に3単位。12の頸部には直径0.2cmの小孔が1ヶ認められる。12・13とも外面へラミガキ、内面ナデと思われるが、ともに磨滅のため明確ではない。12・13とも胎土に砂粒をかなり含み、軟質。12は淡い茶色、13は黄褐色を呈す。12は推定による口径11.1cm、高さ7.9cm、底部径5.4cm、残存50%。13は口径12.6cm、高さ6.4cm、底部径6.4cm、残存80%。

14は小型の壺の胴下部～底部である。刺突文を充填したヘラ描波状文が施される。外面ともナデ。胎土は砂粒をかなり含み、茶褐色。推定口径5.0cm。

15は有孔鉢の底部である。直径1.0cmの底部孔は焼成前に穿孔されたもの。外面ともにハケ。胎土は砂粒を含み、黒色を呈す。底部径5.0cm。

16～22は甕の頸部もしくは胴部片である。16はヘラ描直線文・刺突文・櫛描文が縦位に配される。17～20は横位のヘラ描直線文・山形文・重山形文・刻み目文のそれぞれ組み合わせ。18は直線文が交差し区切る四角に点を有する文様である。21は櫛描羽状文・同平行線文が太いヘラ描沈線により区画されるもの。22は櫛描による波状文。すべて胎土に砂粒を含む。16・17・22はやや軟質。20は黒褐色、その他はほぼ褐色系の色調。

23～32は甕の口縁部もしくは胴部片である。25の口縁は外反するものだが、23・24は受け口状となる。23・25は口唇部を繩文がめぐる。口縁部23は繩文地文に櫛描波状文、24は繩文、25は櫛描羽状文の一部が認められる。26～31は櫛描文が斜め方向・羽状・縦位・横位にそれぞれ施されるもの。26・30・31には刺突文がある。32は櫛描による格子目文様。すべて胎土に砂粒を含み、大半が軟質である。色調は全体に黄褐色～暗褐色。

33・34は鉢の胴部片である。33は繩文がヘラ描曲線文により区画されるもので突起が付く。34はヘラ描波状文。ともに胎土に砂粒を含み、33は暗褐色、34は暗灰色を呈す。

## (2) 石 器

包含層中より数点出土している。弥生時代のものがすべてではないが、石器をここにまとめておく。

35は安山岩製の縦長剣片である。表面はかなり風化している。旧石器の可能性も考えられる。重さ37.1g。

36の石斧は縄のある安山岩製である。基部側正面に自然面を残し、剥離面右側には数回の二次加工が施される。重さ122.1g。

37・38は安山岩製の打製石器である。37は基部側正面の下端部から右側縁にかけて二次加工が施され刃部が作出される。38は基部側正面下端部に二次加工が施され、ノッチ状に刃部が作出される。ともに黒灰色。37は93.0g、38は59.3g。

39・40・41は自然石を用い敲石として使用されたもの。いずれも使用の痕跡は1ヶ所にとどまらない。39は291.0g、40は524.7g、41は250.9g。

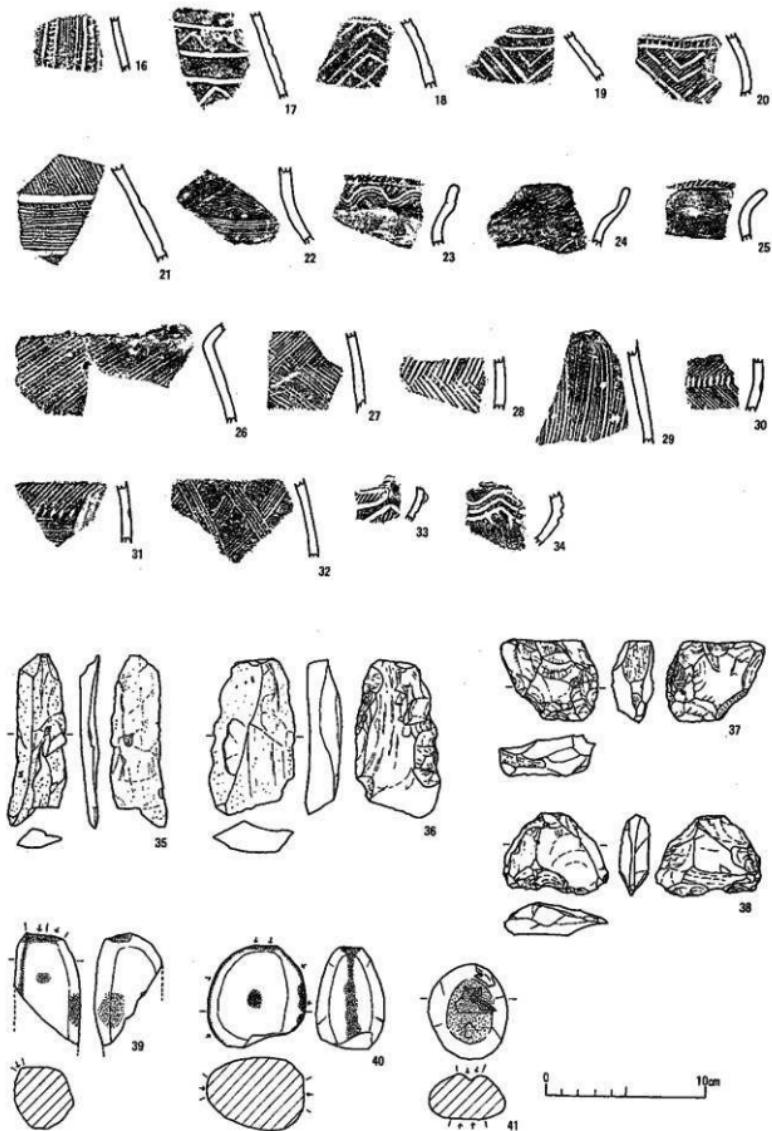


図9 弥生時代の土器 2 1:3

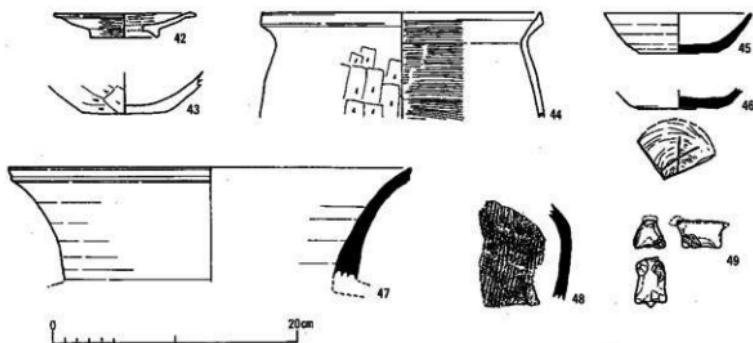


図10 平安時代の遺物 1:4

### C 平安時の遺物

#### (1) 土器・陶器

平安時代の遺物が包含層中から少量出土している。

42は高台付の土師器皿である。内外面ともヘラミガキ。胎土は砂粒を多く含み、軟質。色調は明褐色。口径11.6cm、高さ2.0cm。

43は土師器甕の底部である。外面はヘラケズリ、内面は磨滅のため分からず。胎土は砂粒をかなり含み、軟質。色調は暗褐色で内面に炭化物が付着する。底部径6.6cm。

44は土師器甕の口縁部～胴上部である。口縁端部が内屈する越後型の甕である。外面は口縁部はロクロナデ、胴部はヘラケズリ、内面はハケ。胎土は砂粒をかなり含み、軟質。色調は黄褐色を呈す。推定口径23.2cm。

45は須恵器環である。内外面ともロクロナデ、底部外面には糸切り痕が残る。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、灰色を呈す。口径12.0cm、高さ3.3cm、底部径6.2cm。

46は須恵器環の底部である。底部外面にヘラ描による「X」記号がある。胎土は砂粒を含み、硬質。色調は褐色。推定底部径6.6cm。

47は須恵器甕の口縁部である。内外面ともにロクロナデ。胎土は砂粒をほとんど含まず、焼成は良好。外表面に自然釉がうすくかかる。推定口径23.2cm。

48は須恵器甕の胴部片である。外面はタタキからカキメ。胎土は砂粒を含み、硬質。色調は暗褐色。

#### (2) 土 製 品

四足の動物を形どったミニチュアの土製品が1点出土している(49)。頭部・左前足・尾の先端部を欠損するが、犬を形どったものと推定される。胎土は砂を含まず、やや軟質。淡乳褐色を呈す。全長4.0cm、重さ18.4g

## 第4章 まとめ

遺跡は、外様平に突出した東長峰丘陵の東側に位置している。東長峰丘陵の北半は、古くから遺跡であることが知られており、故神田五六氏、桐原健氏、飯山北高等学校地歴部等により過去数回にわたって調査が行われている。しかし、これらの調査の対象地点は、遺物が濃密に分布する丘陵の北、西、南の緩傾斜面が中心であって、急傾斜面を有する東側は全く省みられなかつたのである。

遺跡名も地名や部落名を冠し、統一性に欠けていた。例えば、尾崎、山崎、柳町等である。遺跡名の呼称については、それぞれ歴史的背景が存するので一概にはどうこうすることはできないが、遺跡の存在する東長峰丘陵北端部は、地域的にまとまった地帯である。このようなまとまりをもった地域に複数の遺跡名が存在するのは混乱を招き好ましいことではない。統一した遺跡名に早急にすべきであると思う。それには、桐原健氏が提唱し、学史的に名高い柳町遺跡が最も当を得ていると思われる。このことについては、「第一章 遺跡の位置と環境」で望月は「地点的に從来の場所より離れていたため、とりあえず「両面寺遺跡」としたい」とし、「遺跡全体の範囲等については将来的課題としたい」としている。しかし、飯山地域においては、学史的にも著名な遺跡であり、遺跡の範囲も含めて早急にきちんとする必要があろう。

さて、ここで「両面寺遺跡」とした地帯は、從来等閑視されていた丘陵の東側斜面にあり、西側斜面に比して、急傾斜を示している。このような急傾斜面にも遺物が分布し、遺構の存在が認められることは、注目に値する。東南方、指呼の間に飯山地域最大の弥生遺跡である小泉遺跡群がある。東長峰遺跡や小泉遺跡群で発見された弥生集落と柳町遺跡を中心とする東長峰丘陵北半の弥生集落との有機的関連について、今後究明していく必要があろう。

今回の調査の最大の成果は、東側斜面にも遺跡の存在が確認できたことと共に、弥生中期の完形に近い土器が數点発見されたことである。今回発見された弥生中期の資料は、当地域の弥生中期の土器研究に貴重な資料となるであろう。また、僅少ではあるが繩文前期の土器破片が発見されたことも特筆に値しよう。また、平安期の土師器、須恵器の発見もあり、丘陵東側斜面が西側斜面に比して急傾斜という悪条件にもかかわらず、繩文前期、弥生中期、平安時代の人々に利用されたことを物語っている。石器では、旧石器時代の可能性をもつものを含めて数点出土している。

遺構では、土坑、溝状遺構、多数の円形柱穴等が発見されているのみで、特筆すべき遺構の発見はなかった。以上、今回の調査で得た成果の概略と遺跡に対する感懐の一端を述べ、雑駁ではあるが“まとめ”としたい。末尾ながら調査に從事された皆さまに心よりお礼を申し上げる。

# PLATE



◀ 遺跡遠景  
(南東から)



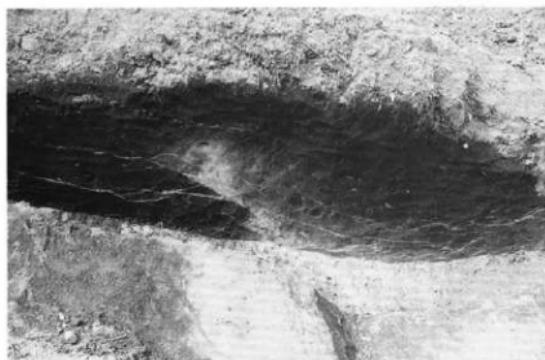
◀ 調査地より眼下の水田を望む  
(南西から)



◀ 作業風景 L～N-4～6区  
(南から)



◀ 0～Q区土層  
(東から)



◀ Q・R区土層  
(南から)



◀ Q・R区土層  
(南西から)



◀ M～P-4～6区調査風景  
(北から)



◀ M～P-4～6区完掘全景  
(南西から)



◀ M-4区焼土坑SK2  
(南から)



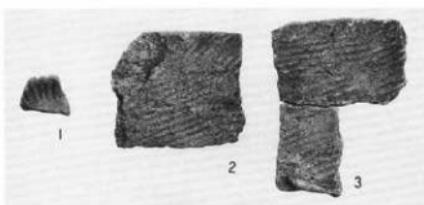
◀ L～P-2・3区  
遺物分布状態全景  
(東から)



◀ N-3区遺物出土状態  
(西から)

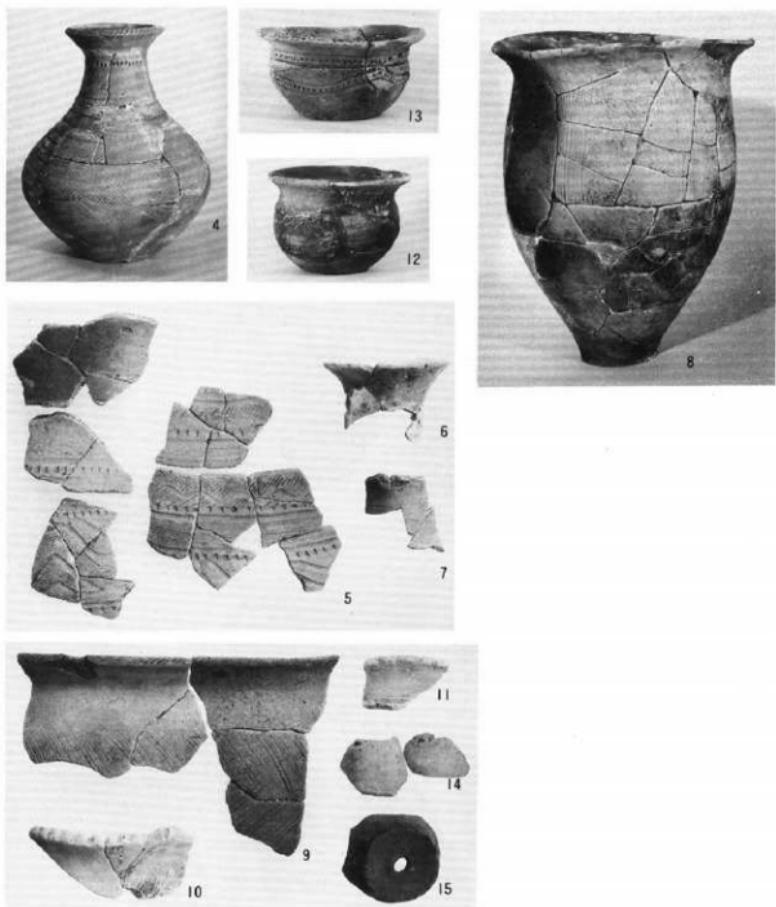


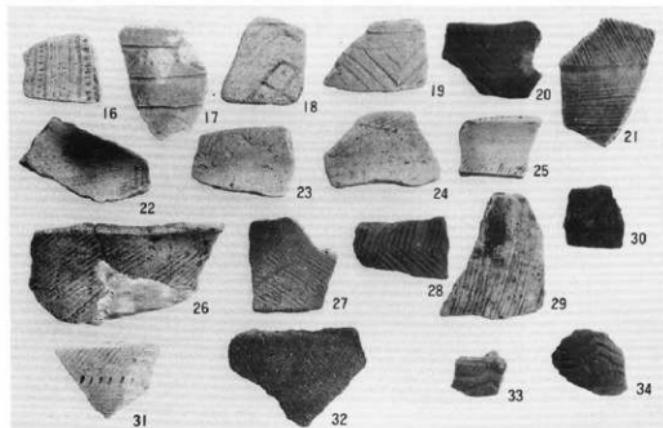
◀ 同上遺物出土状態  
(北から)



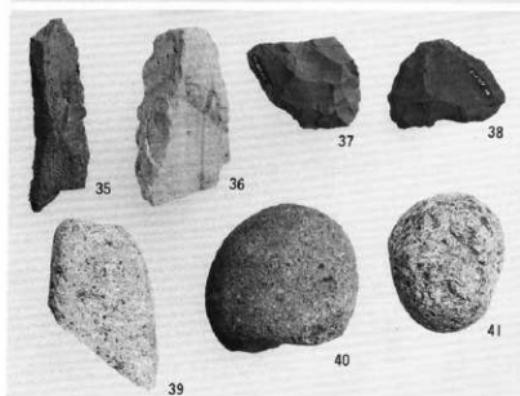
◀ 繩文時代の土器

▼ 弥生時代の土器

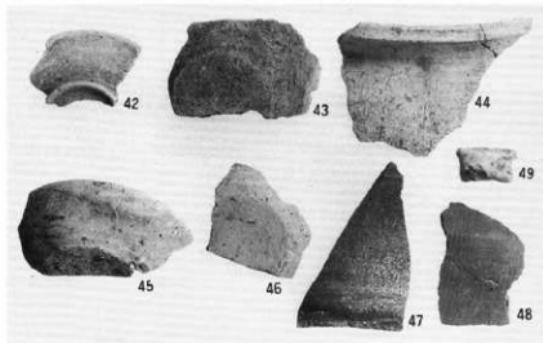




▲弥生時代の土器



◀石器



◀平安時代の遺物

飯山市埋蔵文化財調査報告書 第48集

## 両面寺遺跡

平成7年3月15日 発行

編集・発行者 飯山市大字飯山1110-1  
飯山市教育委員会

印 刷 所 飯山市大字常盤5733-1  
(株)岸田孔版印刷所

